

母

鳥越敦司

私は母に反抗した。それは、今でも続いている。今は私も五十一歳。母は七十七歳だ。父も母もまだ、生きている。

小学校高学年の頃から、反抗し始めた。口汚く罵る私に瀬戸物の皿が飛んできて、私の頭に当たった。わたしの頭からは血が流れ出した。少しだけだが。近くの整形外科に行って、簡単な手当てをうけてただけだったが。

これよりもっとひどい母親はいる。コインロッカーに捨てるとか、など。最近でも虐待して殺してしまったとか。

それ以降は、母親は私に手を上げることはなくなった。

そんな私は、最近ようやく電子書籍を出すようになり、いくらか売れた。作家になりたいと中学生の終わり頃に思っていたが、働く事に精を出してしまったりしたりして、作家など考える事もなくなった時もある。

よくよく思い出すと、幼年時代、私は寝る前に母親に幼年むけの雑誌にある漫画、それは確かに「おぼけのQ」だった、それを母に声を出して読んでもらった記憶がある。

幼稚園生のころだったろうか。

その前の記憶は確かではないが、言葉だって母親が教えてくれたに決まっている。

小学校低学年の頃、家族で公団の団地に住んでいた時、児童文学全集のセールスマンが来た。母は私に、児童文学全集がいるか、どうか聞いた。

私はいる、と答えた。

豪華な装丁の世界児童文学全集が私の部屋に並べられた。私は主に寝る前に、その中の一冊を手にとって弟が下に寝ている二段ベッドの上に入ってから読むのが習慣になった。

それらの中には夏目漱石の「坊ちゃん」もあった。

これらは記憶の底に沈んでいるが、私の心の財産かもしれない。あの時、母が私にどうか聞かなかつたら、私は文章を書くことなどしなかったかもしれない。

小学生向けの雑誌も毎月、買ってもらった。私は楽しく、それを読んだのだった。

今になって考えると、父と母は不和だった。原因は父の浮気にある。それを知っても、小学生の私には詳しい事は分からない。つまり肉体関係とか、そういう事が。

それで父の子である私を同じように憎んでいたのだろう。私は母親が包丁を持って本気ではないだろうが、父に差し向けたのも見ている。父は、その包丁を取り押さえたが。

その浮気相手の女が団地に乗り込んで来た事も一度、あった。バーのホステスだ。夜中まで父と母と、その女で話し続けたが、最後は母とその女と、取っ組み合いのけんかになった。私が、その女をどうにかしようとする、父はとめた。まだ、わたしも小学校五年の頃だ。六年かもしれない。どっちか覚えてないけど、小学生だったのは確かだ。

父が警察に電話して、父とその女は警察署に行った。特に事件にもならなかつたらしい。

翌朝、髪の乱れた母は、

「この髪じゃ、どこにも行けんね。」

と言った。母は長崎の出身で、父は福岡市、その団地も福岡市にある。今はその団地は、昔のものを取り壊してアーベインという巨大な団地になった。棟数は、それほどない。

子供は母の影響を受けるのが普通なのかもしれない。母は朝、八時から始まるNHKの連続テレビ小説なるものをいつも見ていた。小学生の私も、それにつられて八時十五分に終わるそのドラマを最初から最後まで見て、登校した。その団地にいたのは中学一年生までだったけど、その間、朝のそのテレビドラマは一つの部屋で母と共に見た記憶がある。

自分もそれを見るのが好きだったのだろうと思うが、大人向けのものである。私は小学生にして、そういうドラマを見て育った。

これらは自分の頭の奥深くに、どこか残っているだろう。高校生になって映画に熱中したのも、子供の頃の下地があったからこそだろう。

母はドラマを見るのが好きな女性だった。少し前に実家に帰ると、劇団四季のお礼状やパンフレットを見たので福岡市にある博多座にでも見に行ったのだろう。

冒頭に皿を投げるなどした母を書いたが、そのあと私は盲腸で入院した時に、つきっきりで病院にいたのも母だったのだ。一ヶ月ほど入院したが、手術後、ごろごろ寝ているだけになると退屈になった時、

漫画を読みたいから貸し本屋で野球の漫画を借りてきて欲しい、というような事を言うと母は誓いの魔球という漫画などを借りてきてくれた。返しにも行ってくれた。

その頃、わたしは野球をしていたので、そういう漫画が読みたかったのだ。

中学二年の時に柔道をしていて、日曜に母とデパートに行った時に

「柔道の本が欲しい。」

というと、私が指定した本を買ってくれた。

ああしてくれ、こうしてほしい、というと大抵、母は聞いてくれた。

小学校の頃、こまを回して遊んでいたら、団地から母が降りてきた。帰ってきた時には、大きなこまを買ってきてくれたのだった。

母は私が本好きである事を知って、児童文学全集を買うかどうか、聞いたのだろう。

こうして考えると、ものを書く人間ができあがるには母親の気遣いや、労力もあることがわかる。少なくとも自分の場合は、そうだった。

わがまま勝手な自分の言う事を、一番聞いてくれたのも母だったのかもしれない。

高校一年の時、地方新聞の投書欄に私の投書が載ったのを大事に取っていたのも母だった。

誰でも母がいなければ、人生変わるのではないかなあと思う。